

図書名 離れ折紙 著者名 黒川 博行 出版社 文藝春秋

「赤」というよりは、「紅」とい、たほうが近いだろうか。豪奢に着飾、た太夫の着物の色は紅色で、背景はそれと呼应するように鈍い紅色をしている。強烈な装画に惹かれて手に取ったのが『離れ折紙』黒川博行著である。装丁だけで本を選ぶと多くは裏切られる。いい意味で、この本には本当に裏切られた。もっといえば騙された。私は書名と装画から、てっきり時代小説だと思い込んでいたのだ。

舞台は現代の京都。毎回、ある骨董品や美術品によ、て巻き起こされる6つの短編小説で構成された332ページ。主人公の澤井は、工芸専門のフリーランサーのキュレーターをする一方、美大で非常勤として教鞭も執、ている。ただ、この澤井という人物なかなかの曲者。否、自分に正直なだけかもしれない。ある時、澤井は割れてしま、ている硝子のレリーフを手に入れる。それは幻と呼ばれるような作家の作品で、もし完璧であれば割れた状態の10倍近くの価値があると知る。そこで

澤井は、割れたレリーフを完全な形に戻そうとするのだが…。

書名の「離れ折紙」は、6つの話しの内の1つの題名でもある。ここでの「折紙」は、「折紙つき」というときの折紙で、書画・骨董などにおいて作者や由来を証明する鑑定書として、日本刀と共に登場する。日本刀と、それについていた折紙が離れたとき物語は動き出す。そして、全てを読み終えた後、なぜ書名にな、っていたかも解き明かされる。

美術品の価値の危うさを通して、人間自身の価値判断の危うい有り様まで描いている小説である。何に価値があり、真実は一体どこにあるのかといった事を考え本を閉じる。あの装画が現れた。作者は日本画家の黒川雅子氏。本書者の黒川氏とは、同じ京都の美大出身だそうだ。少し毒のある文体と情景描写の的確さに、妙に納得した。お二人とも同じ黒川の姓だが、これは偶然なのか必然なのか。表紙の装画にも注目したい美術ミステリー。